

「整備計画」で確認したいこと

1. 計画の経緯と今後の手順と予定

現在の公園を整備計画ができるまでの経緯は、「平成26年10月11日号区報掲載」、「平成28年4月24日砂町文化センターで説明会」、「公園：調査・設計：平成25年度～平成28年度」との記載だけです。

何件のどのような意見が寄せられたか、何人が集まりどのように説明されたかが分かりません。

また、計画が発案された背景、時期、議会の承認、予算、計画決定までの経緯をはじめ、これまでの公園調査の内容も分かりません。

予算については、Q & Aに公園工事約20億円、道路工事は約20億円、総事業費40億円としか示されず、内容が分かりません。

今後の手順について、今後の設計業務で検討とありますが、公園調査・設計は～平成28年度で、限られた時間しかありません。今後の予定がもう少し分かると思います。

2. 公園や道路の利用の現状

計画の経緯とともに、公園や道路の現況についても、公園と道路の断面と平面図、数枚の写真のみで、周辺の状況や公園の江東区における位置づけ、地域との関連や利用状況に関する記載がありません。

平成25年度から調査・設計が行われているとされていますが、どのような調査を行ったのか、その結果とそれがどのように設計に反映されたかが分かりません。

公園は、日常において、早朝の散歩、ジョギング、犬との散歩、ラジオ体操をはじめ、近隣の保育園、幼稚園、小学校でも利用しており、付近の高齢者施設や遠方からの散歩、多くの鳥が飛来することから、撮影に訪れる方も多くいます。

また、サクラの開花期だけでなく、現在の公園にはちょっとした空間が

数多く点在し、レジャーシートを広げるなどして、ピクニック的に利用するご家族、ママ友さんたちとその子どもたちなど、グループで利用する方の姿が多く見られます。

そのほか、土の広場など、広場的な空間では、午前中にゲートボール、学校が終わった後には、自転車をネット代わりにしたテニスなど、工夫した利用も見られ、壁当て広場では、早朝に大人の方の利用が多いほか、休日や学校が終わった後は、子どもたちの壁当てやキャッチボールなどをする姿がみられます。

水辺のひとつ、八ツ橋の池では、魚釣りをする大人やザリガニ釣り、ザリガニやエビ、小魚を捕まえる子どもたちの姿があり、遠方から訪ね来る家族もいます。また、水路で釣りをする人もいます。

公園では、このようにさまざまな方々の多様な利用があります。

計画の検討に当たり、公園や道路の利用状況の把握とその情報の公開が求められます。

3. 公園の植物や生きものの現状

「区民の森」として、さまざまな検討の上、植栽された樹木は30年にわたる管理の結果、現在の大木になっています。

サクラも含めて整備の支障となる樹木は伐採されます。ソメイヨシノの寿命が短いため、別種も入れて欲しいとの説明会での意見がそのままQand Aにあります。弘前公園では百年を超える大木が標準木以上に開花しており、都内にも百年を超えるソメイヨシノが存在しています。

樹木は管理次第で健全にも不健全にもなり、正しい情報の提供が求められます。

また、生きものについてはQ and Aで、工事のため一時は影響が出るが、帰ってこられる多様な公園づくりに



公園に設置された「整備計画のお知らせ」

努めるとしていますが、具体の対策は示していません。

東京都のレッドデータリストで「絶滅危惧Ⅰ類」で希少種の鷹「ツミ」が公園内のマツに巣をつくり、ヒナも育てていますが、このマツも伐採対象になっています。

水辺についても、水路は現在、大横川からサイフォンで取水した汽水が流れていることから、ハゼなどの生きものが生育し、カモなどが繁殖しています。ガマの池や八ツ橋の池は真水であるため、モツゴやヤマトヌマエビなどが繁殖し、これを捕食するサギ、カワセミなどが飛来しています。暗渠化され、浅い水路しかない場合、現在生息している多くの生きものが生息できません。

現在、公園で見られる野鳥や樹名板をつけた樹木はありますが、公園内の樹木の種類や本数とその大きさ、昆虫や鳥類、魚類等の種類と数などの把握とその情報の公開が求められます。

4. 経緯や現況、計画の共通認識

計画の目的や経緯、手順をはじめ、現在の状況、そして、整備計画の内容といった諸条件、事実関係を知った上で、はじめて意見や要望などの検討が可能になります。前提となる諸条件、事実関係の共通認識がない

象地は大正期に設けられたとされていますが、公共施設の整備、とりわけ周辺との関連性が高い公園においては、周辺の土地利用、地域性、江東区における位置づけなど、整備対象区域だけでなく、多様な関係性に考慮する必要があります。

今回の整備対象は、開園からすでに30年を経た公園であり、「区民の森」として、樹木の管理育成を行ってきた公園です。

また、江東区は、「江東区基本構想」（平成21年3月）、「江東区長期計画」（平成22年3月）、「江東区CITY IN THE GREEN（緑の中の都市）ビジョン」（平成24年7月）を策定しており、「水と緑豊かな地球環境にやさしいまち」を掲げ、緑化と温暖化対策の積極的推進、区民・事業者・区が一体となった緑化の推進、水辺・潮風の散歩道を新たに約2,000㎡整備するなどとしています。

今回の整備計画で、道路や園路の拡幅により、園路を除く公園面積は9,900㎡減少し、30年をかけて成長してきた樹木の多くが伐採となります。

当初、「区民の森」として整備した経緯や江東区の基本構想との整合性など、公園利用者や地域住民をはじめ、江東区民のより多くの方々の理解を得た整備が求められます。



園内はピクニックの利用も多い



公園内に営巣するツミ



八ツ橋に飛来したシラサギの親子とアオサギ



広場を活用してのテニス



犬の散歩はコミュニケーションの場にも



公園は自然観察の場としても利用



「仙台堀川公園」Google Earth より

「整備計画」への要望や提案

1. 道路拡幅再考と公園の一体化

今回整備対象の道路は、区内では決して狭い道路ではありません。今回の整備対象道路と接する小名木川両岸は一方通行になっており、車の対面通行が可能で歩道も設けられているこの道路の方が広く、電柱倒壊による危険性については、この地域に限ったものではありません。

また、道路が狭いため不十分な緑化も整備の理由とされ、植樹帯を新設する計画ですが、すでに緑がある公園を減少し、道路に植樹帯を設置するのは合理性に欠けます。植樹帯で十分に植物が生育する環境条件を整えるための費用や維持管理費が増え、狭いといわれる道路を有効に活用する点、物陰ができ安全性の確保の点からも再考が求められます。

また、清洲橋通りと東側区道についての危険性が説明会の意見にあります。区道から清洲橋通りに出る際に右側にある歩道橋が視認性を妨げており、この歩道橋の利用者はあまりおらず、歩道橋下に駐停車する車により、さらに見通しが悪くなります。このため、西側区道の信号と連動した信号および横断歩道の設置などが求められます。

今回の整備対象となる仙台堀川公園と清洲橋通り以南の仙台堀川公園は、断絶していますが、釣魚場の西側は空き地となっており、この空き地を活用し、清洲橋通りの下をくぐる通路を設けることで、公園をつなげることができます。

仙台堀川公園は他の場所において



仙台堀川公園の西側区道からみた清洲橋通り。直進方面に釣魚場裏の空地がある。



釣魚場裏の空地。この空地の利用すれば、仙台堀川公園をつなげることが可能になる。



仙台堀川公園は道路と交差する多くの場所で地下道での連続性が確保されている。

も道路下に通路が設けられており、同様の手法で公園の一体化を図ることが可能であり、公園の長さを活かしたジョギングコースとしての利用をはじめ、安全で快適な公園整備につながります。

2. 安全で快適な園路空間を

「公園内の歩行者と自転車の錯綜」、「自転車の増加による歩行者への危険」が掲げられ、具体的なデータは示されていないものの検討の必要があることは理解できます。しかし、この課題解決のため、自転車走行空間を公園の両脇の道路に新設し、そのために公園が減少することの合理性については、十分な理解ができません。

同じ仙台堀川公園の他の場所においても、歩行者、自転車のレーン区分による通行がなされており、今回、歩行者と自転車のレーン区分による通行がなされており、南砂緑道公園、大島緑道公園も、歩行者と自転車のレーン区分により、園内の通路を共用し、今回の整備においてもあえて自転車専用レーンを車道に設ける必要はないと思います。

このように歩行者と自転車の課題を現在の幅員で解決できれば、公園面積を減少させずに済み、現在の公園と道路の境になっている仙台堀川の護岸撤去が必要条件とはならないため、事業費の削減も可能で、こうした費用を清洲橋通り下の通路などに有効利用することも可能なのではないのでしょうか。



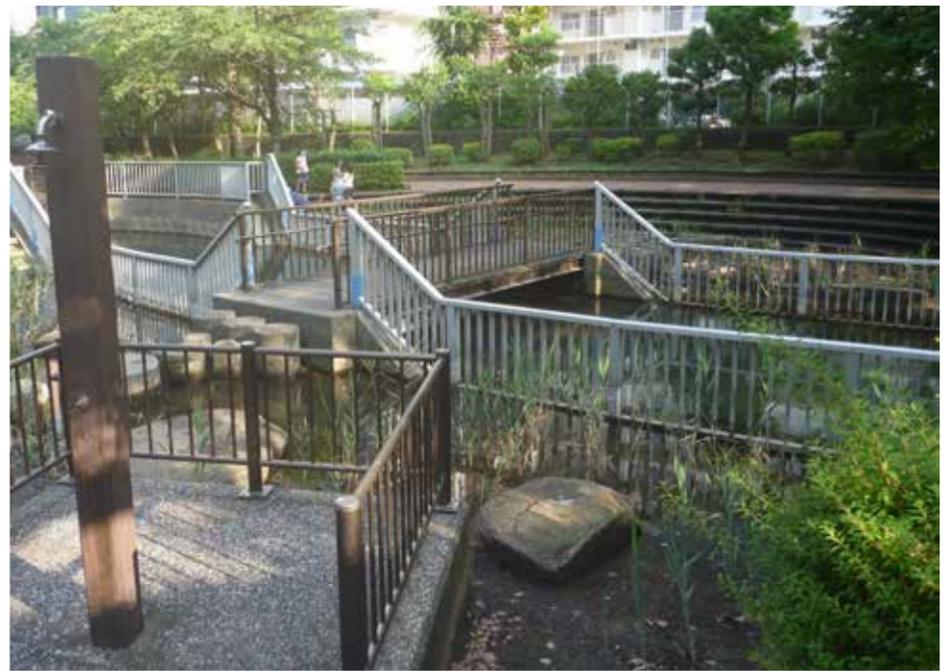
仙台堀川公園の歩行者と自転車のレーン区分による園路利用 ①



仙台堀川公園の歩行者と自転車のレーン区分による園路利用 ②



南砂緑道公園の歩行者と自転車のレーン区分は、不必要なレーン交差もみられる。



仙台堀川公園の他の水辺。汽水が流れる水路は深い部分に柵が設けられ、干満で変化し、シャワーもある。水辺には生きものの姿があり、カニを捕まえている子どもたち。

また、平面比較にあるとおり、既存の公園の園路は、直線と曲線の2つの園路がありますが、整備計画ではまっすぐな園路が1つで、直角に曲がる部分が2カ所あります。自転車を気にせずに歩ける園路など、園路についての再考が求められます。

3. 親水性と水路への提案

既存公園の親水性については、「水面が遠く親水性が低い水路」としか、記載がありませんが、現状でも柵内に入れるようにするだけで水辺に親しめる場所が整備されています。

また、既存公園には、水路のほか、「ガマの池」、「八ツ橋の池」があり八ツ橋の池においては、柵などは一切なく、水面へのアクセスが可能で、水辺を利用する多くの人の姿があります。

そのほか、夏季にはワンダフル水路にも通水され、水遊びが可能で

シャワーも設置されています。

さらに、親水性という点、水遊びや眺めの観点から考えがちですが、既存公園では水路で魚釣りをする方々もおり、水に親しんでいます。

整備計画では、現在の水路を暗渠化（地中化）し、ポンプによる汲上げで、最大水深30cmの水路を整備するとしていますが、このような水路では現在生息している生きものの多くは生息できず、ポンプ使用のため生きものの流入もありません。

「歴史的な運河のイメージを整形的な水路を整備することで具現化する」としてはいますが、かつての護岸を活かし、かつての運河と同様に汽水域の魚を釣ることができる親水性も仙台堀川公園の重要な親水性の一つだと思います。

これらに配慮した上で、景観的にも美しい、修景に配慮した設計が求められます。



現在の直線水路の一部は親水性に配慮されているが柵で入ることができない。①



現在の直線水路の一部は親水性に配慮されているが柵で入ることができない。②



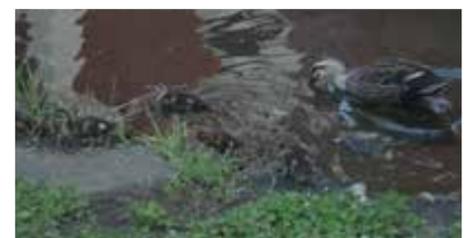
現在の直線水路の一部は親水性に配慮されているが柵で入ることができない。③



ワンダフル水路とシャワー。水遊びの季節だが今年度は利用不可で来年度は工事。



仙台堀川公園の他の水辺。ポンプアップで生きものはおらず、浅く藻が繁茂している。



仙台堀川公園の他の水辺。深場に柵があり、なだらかな傾斜で陸との境がない設計です。

4. 公園面積を減らさない提案

公園は現在も両脇の道路からアクセス可能ですが、公園内に緊急車輛が通行できるよう既存の幅 3.0 m の園路を拡幅し、幅 4.0 m の園路を設けるとしています。これにより、整備後の園路を除く公園面積は 9,900 m²減で、既存の 7 割に縮小されます。

整備計画による新たな道路空間は、自転車走行空間と植栽帯と車道の 50cm 増です。例えば、50cm 以上ある護岸を撤去し、厚みのないフェンスとし、自転車走行空間と植栽帯を設けない場合、公園面積を減少させることなく整備計画で求める車道の拡幅は可能です。

江東区では約 85% が共同住宅に居住していることなどを踏まえ、江東区 CIG（緑の中の都市）にも力を入れていますが、江東区の一人当たり都市公園の面積は平成 24 年 4 月の 4.71m²から平成 27 年 4 月の 4.52m²と、多くの自治体で人口減による一人当たり公園面積が増加がみられる中、人口増などに伴い毎年減少を続けています。

新たな公園用地の確保が難しくなっている江東区にあっては、既存の公園緑地の保全は江東区の施策でもその重要性が示されており、現在の公園を減少させることなく、課題を解決する計画が求められます。

5. 公園の価値を高めるための提案

仙台堀川公園は 30 年余りの歴史を持ち、地域で育った方のふるさとしての原風景となっています。

整備対象となっている旧仙台堀川は、かつて砂町運河として民間の手により開削された例の少ない運河とされており、1919 年（大正 8 年）に東京運河河土地(株)が創設され、1922 年（大正 11 年）に着工と 1 世紀の歴史を有します。

公園は利用価値と存在価値、潜在的な価値があるとされています。

利用価値については、現在の利用状況に示したとおり、散策や遊び、

学習の場など、さまざまな利用がなされています。

整備計画では、現在の土俵がなくなり、短距離走路の新設などが示されていますが、仙台堀川公園の長さを生かしたマラソンコースとしての利用など、公園の特性を踏まえた時代のニーズに応じた施設の改修について、ニーズの調査など、施設整備についても再考が望まれます。

存在価値は、CO₂ の削減や微気象緩和、生物多様性の保全などであり、存在価値に含まれるともいえますが、潜在的価値には、火災時の延焼防止、災害時の避難場所、復旧拠点などがあります。

また、存在価値のひとつには、歴史的な価値もあり、文京区の元町公園では、歴史性を踏まえ、既存公園のディティールを損なうことのないよう管理されています。

仙台堀川公園においても、現在、継ぎ足し護岸の歴史的な解説を示しつつ、壁当て広場としての活用が図られています。

入場料などを徴収する公園ではなく、市場価値を測ることは難しく、存在価値、潜在価値となるとさらにその価値を図ることは困難ですが、ニーズを捉えることで、より多くの人々が有効に利用でき、より豊かな緑、自然となることによって、存在価値も高まります。このためにも、既存の施設や緑、自然を損なうことのないような整備が求められます。

6. 公園の自然をさらに豊かに

緑や自然の価値については、公園の存在価値として、その概要を先に示しましたが、今回の整備対象ではありませんが、仙台堀川公園の「鳥の島」においては、整備当初「こんなところに鳥が棲むはずはない」との指摘があったそうですが、30 年という時間を経て、水鳥の繁殖の場となっています。

今回に整備においても、現在の緑や自然の保全はもちろん、公園の自然をさらに豊かにするための取り組

みが求められます。

例えば、土崖の穴に営巣するカワセミの生息に配慮した環境整備、ホタルの繁殖に配慮した水辺の整備など、これまで公園になかった新たな環境を整備することで、より多くの生きものが生息する空間にすることも可能となります。

これまでの公園や周辺環境、また、自然への影響を考慮した環境整備が求められます。

7. 将来の運営・管理への提案

公園は、整備だけでなく、整備後の運営・管理が大切です。現在の公園もこれまでの管理があったからこそ、現在の公園となっています。

しかし、現在の公園についても、当初の計画意図が反映されていない管理状況もあるとの指摘もあり、今回の整備計画においては、整備後に計画意図が十分に反映されるような運営・管理について、合わせて考えることで、より良い公園にしていくことが可能になると思います。

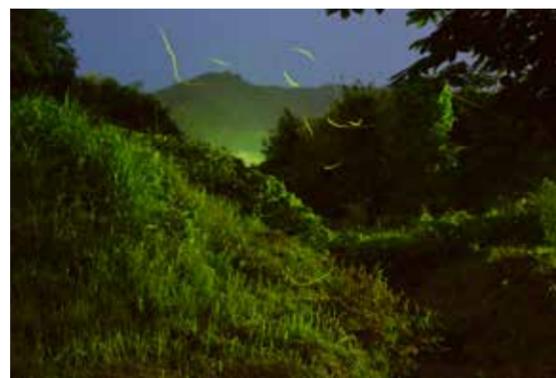
今回の整備対象部分においても、当初計画では、林床の植物が配されていたそうですが、樹木以外は一律の草刈で現在、林床の植物はほとんどみられなくなっています。

古石場の公園において、水路に汽水の満ち干を取り入れたところ、アサリがみられるようになりました。しかし、水底の清掃の際に、すべて浚渫してしまったために、現在はみられなくなりました。

このように、当初の計画での配慮がなされていても、その後の管理で失われてしまうことがあります。

最近では、草地管理や選択除草などが一部の公園で進められており、こうした管理手法の導入で、より多様な植物や生きものを公園で見ることができるようにもなります。

現在、現在の公園利用者の中には、鳥類に詳しい専門家もおり、昆虫などの自然観察などを行う専門家、さ



水辺の設計次第でホタルが生息する公園にすることも可能で、管理次第で公園はもっと豊かにできます。

らに、樹木や公園の管理に精通した方など、専門的な知識を持つ方も多く、こうした方々による環境学習など、近隣、保育園、幼稚園、小学校でのさらなる利用も考えられます。

ウォーキングやランニングに配慮した公園が整備されれば、こうした専門家を迎えての講習などの開催でき、仙台堀川や周辺の歴史に配慮した公園整備により、今まで以上に待ち歩きの間としての利用も高まります。

また、公園内にアメリカザリガニを放す人の存在や不用意に食べものを与えるために、カモが健全に育たず、死んでしまうこと。公園内に残る手作りの樹名板は、近隣の園児、児童が制作したもので、園内の伐採樹木を利用したものであることも、今回、公園でさまざまな方の声を聞くことでわかりました。

こうした公園の利用者の声を聞き、これまで以上に公園と周辺地域、公園を利用する方々との交流を大切にしていくことで、仙台堀川公園がより良い公園になるとの想いを強くしました。

整備計画をはじめとするハード、どのように利用、管理していくかといったソフト、そして、これらを組み合わせ合わせた仕組み・システムの 3 つの取り組みが求められます。

今回の整備計画に合わせて、こうしたソフトやシステムについての検討も合わせて検討していただきたいと思っています。



南砂の路上に設けられたマラソンコース。仙台堀川公園内に設置すればより快適。



愛犬との散歩の場としての利用も多く、ドッグランのニーズもあるのでは…。



整備対象の仙台堀川公園で林床の植物がほとんどみられない地面。適所管理が必要。



整備対象の仙台堀川公園にある説明版。より多くの鳥がみられる公園にすることも可能。



仙台堀川公園の他の水辺。壁面の活用は整備対象地でも応用でき、パブリックアートに。



以前、近隣の幼稚園、小学校などで作られていた樹名板。こうした参加も望まれます。



古石場の親水公園。いち時期アサリなどが生息していたが、浚渫によりいなくなった。



壁当て広場は、護岸の歴史を残し有効利用されています。こうした公園資産の活用を。